

博士論文（要約）

論文題目 空間表現に関する日中対照研究

—認知意味論の立場から—

氏名 鄭若曦

目次

第1章 序章	6
1.1 認知意味論における空間表現の重要性.....	6
1.2 本研究の主な関心と論文の構成.....	8
第2章 日本語と中国語の空間表現の基本的特徴	11
2.1 移動事象を構成する意味要素.....	11
2.1.1 移動事象の基本的な意味要素.....	11
2.1.2 移動事象の付随的な意味要素.....	13
2.2 中国語と日本語の「経路表現」の基本的特徴.....	15
2.2.1 日本語：経路＝中核部； 様態・原因＝非中核部.....	16
2.2.2 中国語：様態・原因＝中核部； 経路＝非中核部.....	18
2.3 中国語と日本語の「場所表現」の基本的特徴.....	21
2.3.1 前置詞句と後置詞句.....	21
2.3.2 場所目的語.....	24
2.3.3 後置名詞.....	27
2.4 まとめ.....	31
第3章 起点と中間経路の連続性- “从” と「から」を中心に	32
3.1 問題提示.....	32
3.2 先行研究と問題点.....	34
3.2.1 日本語の「から」.....	34
3.2.2 中国語の“从”.....	36
3.3 “从”の中間経路用法に関する本研究の説明.....	40
3.3.1 通時的な観点.....	40
3.3.2 共時的な観点.....	47
3.4 「から」の中間経路用法の歴史的変遷.....	59
3.5 まとめ.....	64

第4章 使役移動構文と取得構文のリンクング

	-「与え手」が起点の場合を中心に.....	66
4.1	問題提示.....	66
4.2	「から」取得構文と“从”取得構文の相違点.....	68
	4.2.1 与え手(S)の場所化の有無.....	68
	4.2.2 取得動詞の種類の違い.....	69
	4.2.3 取得対象(P)の種類の違い.....	71
4.3	「から」取得構文と“从”取得構文の拡張原理.....	71
	4.3.1 強制使役から許容使役への拡張.....	72
	4.3.2 「対象の物理的移動」から「取得対象の抽象的移動」への拡張.....	84
4.4	まとめ.....	93

第5章 「探索領域」の言語化

	-「設置動詞」の意味と相対名詞の有無を中心に.....	95
5.1	問題提示.....	95
5.2	「探索領域」の言語化—両言語の「設置動詞」の意味を中心に.....	97
	5.2.1 両言語の「探索領域」を指定する動詞述語の基本的特徴.....	97
	5.2.2 中国語の“放”“包”と日本語の「置く」「包む」.....	99
	5.2.3 中国語の“插”“貼”と日本語の「挿す」「貼る」.....	102
5.3	「探索領域」の言語化—両言語の相対名詞の有無に関する再考察.....	105
	5.3.1 本研究の説明：両言語の「設置動詞」の意味の違いという角度から...106	
	5.3.2 先行研究の再検討.....	108
6.4	まとめ.....	112

第6章 「場所の状態変化」の言語化—場所格交替との関連で..... 113

6.1	問題提示.....	113
6.2	場所の状態変化の言語化に関する日中対照研究.....	114
6.3	場所格交替に関する日中対照研究.....	117
	6.3.1 場所の状態変化＝「覆う系」.....	118
	6.3.2 場所の状態変化＝「満たす系」.....	123

6.3.3	中国語の方がより柔軟に「場所格交替」できる理由.....	126
6.4	まとめ.....	129
第7章 まとめと今後の課題.....		131
謝辞.....		135
参考文献.....		136

本文

博士論文は、5年以内に出版予定である。

参考文献

[日本語]

- 荒川清秀 (1981) 「中国語動詞にみられるいくつかのカテゴリ」『文学論叢』67: 1-25 (荒川清秀『動詞を中心にした中国語文法論集』白帝社, 2015: 119-139 に再録)
- 荒川清秀 (1984) 「中国語の場所語・場所表現」『愛知大学外国語研究室報』8: 1-14. (荒川清秀『動詞を中心にした中国語文法論集』白帝社, 2015: 35-47 に再録)
- 荒川清秀 (1992) 「日本語名詞のトコロ(空間)性—中国語との関連で」『日本語と中国語の対照研究 論文集(上)』, 71-94. 東京: くろしお出版. (荒川清秀『動詞を中心にした中国語文法論集』白帝社, 2015: 13-32に再録)
- 荒川清秀 (2003) 『一步すすんだ中国語文法』東京: 大修館書店.
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論』東京: 大修館書店.
- 池上嘉彦 (1994) 「<移動>のスキーマと<行為>のスキーマ—日本語の「ヲ格+移動動詞」構造の類型論的考察」『外国語学研究紀要 英語研究室論集』41: 34-53.
- 池上嘉彦 (2000) 『「日本語論」への招待』東京: 講談社.
- 石垣謙二 (1955) 『助詞の歴史的研究』東京: 岩波書店.
- 井上京子 (1998) 『もし「右」や「左」がなかったら—言語人類学への招待』東京: 大修館書店.
- 上野誠司・影山太郎 (2001) 「移動と経路の表現」影山太郎 (編) 『日英対照 動詞の意味と構文』東京: 大修館書店.
- 王軼群 (2009) 『空間表現の日中対照研究』東京: くろしお出版.
- 奥津敬一郎 (1974) 『生成日本文法論』東京: 大修館書店.
- 奥津敬一郎 (1984) 「授受動詞文の構造—日本語・中国語対照研究の試み—」『金田一春彦博士古稀記念論文集』2: 65-88.
- 小田勝 (2015) 『実例詳解古典文法総覧』大阪: 和泉書院.
- 影山太郎 (1980) 『日英比較 語彙の構造』東京: 松柏社.
- 影山太郎 (2002) 『ケジメのない日本語』東京: 岩波書店.
- 影山太郎 (2011) 『日英対照 名詞の意味と構文』東京: 大修館書店.
- 影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』東京: 研究社出版.

- 岸本秀樹 (2011) 「壁塗り交替」 影山太郎 (編) 『日英対照 動詞の意味と構文』 東京: 大修館書店.
- 木村英樹 (1996) 『中国語はじめの一步』 ちくま新書.
- 木村英樹 (2002) 「中国語二重主語文の意味と構造」 『認知言語学 I: 事象構造』 東京大学出版会.
- 木村英樹 (2014) 「“指称” の機能—概念、実体および有標化の観点から」 『中国語学』 261: 64-83.
- 言語学研究会 (編) (1983) 『日本語文法・連語論 (資料編)』 東京: むぎ書房.
- 此島正年 (1966) 『国語助詞の研究—助詞史の素描』 東京: 桜楓社.
- 島村典子 (2003) 「動詞の前後に位置する起点と経過点」 『中国語学』 250: 122-136.
- 杉村博文 (1992) 「現代中国語における「むこう」と「こちら」の諸相」 大河内康憲編 『日本語と中国語の対照研究論文集 (上)』, 153-180. 東京: くろしお出版.
- 杉村博文 (2000a) 「“走进来” について」 『中国語論集』 (荒屋勤先生古希記念), 151-164. 東京: 白帝社.
- 杉村博文 (2000b) 「方向補語“过” の意味について」 『中国語』 1: 58-60. 東京: 内山書店.
- 杉村博文 (2011) 「対立空間転位の諸相—「方向補語」再考」 『現代中国語研究』 13: 15-30.
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』 東京: むぎ書房.
- 高見健一・久野暉 (2014) 『日本語構文の意味と機能を探る』 くろしお出版.
- 田窪行則 (1984) 「現代日本語の「場所」を表す名詞類について」 『日本語・日本文化』 12: 89-115. (田窪行則『日本語の構造 推論と知識管理』くろしお出版, 2010 に再録)
- 鄭若曦 (2014a) 「中国語の起点標識“从”の意味拡張—起点標識が中間経路を表す場を中心に」 『東京大学言語学論集』 35: 327-341.
- 鄭若曦 (2014b) 「中国語の中間経路表現に関する一考察—日本語との対照も兼ねて」 『第 149 回日本言語学会予稿集』, 160-165.
- 鄭若曦 (2015a) 「『人の場所化』に関する日中対照研究—『起点』『所有者』『動作主』」 『東京大学言語学論集』 36: 219-237.
- 鄭若曦 (2015b) 「項構造の交替に関する日中対照研究—『覆い隠し動詞』の場合を中心に」 『日中言語研究と日本語教育』 8: 61-71.
- 寺村秀夫 (1968) 「日本語名詞の下位分類」 『日本語教育』 12: 42-57.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』 東京: くろしお出版.

- 中根綾子 (2005) 「動趨式が表す本質的意味—動結式との対照から」 『中国語学』 252: 229-240.
- 中根綾子 (2008) 「移動事態を表す Vx 句と V 到句の意味と形式」 『中国語学』 255: 157-176.
- 長屋尚則 (2015) 「側置詞」 『明解言語学辞典』 : 139. 東京: 三省堂.
- 西村義樹 (2015) 「使役構文」 『明解言語学辞典』 : 102. 東京: 三省堂.
- 西村義樹・野矢茂樹 (2013) 『言語学の教室—哲学者と学ぶ認知言語学』 中公新書.
- 平井勝利・成戸浩嗣 (1993, 1994) 「中国語の『在・トコロ+V』」 と日本語の『非トコロ・二Vする』」 表現の考察 (一) (二) 」 『言語文化論集 (名古屋大学言語文化部) 』 15(1-2): 169-189, 119-132.
- 平沢慎也 (2015) 「多義性」 『明解言語学辞典』 : 147. 東京: 三省堂.
- 彭広陸 (2008) 「類型論から見た日本語と中国語—視点固定型の言語と視点移動型の言語」 第 12 回中日理論言語学研究会ハンドアウト.
- 本多啓 (2013) 『知覚と行為の認知言語学—「私」は自分の外にある』 東京: 開拓社.
- 本多啓 (2015) 「図・地」 『明解言語学辞典』 : 127. 東京: 三省堂.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法・改訂版』 東京: くろしお出版.
- 松本曜 (1997) 「空間移動の言語表現とその拡張」 田中茂範・松本曜『空間と移動の表現』 (日英比較選書 6), 126-229. 東京: 研究社出版.
- 松本曜 (編) (2003) 『シリーズ認知言語学入門第 3 巻 認知意味論』 東京: 大修館書店.
- 松本曜 (2008) 「空間移動の言語表現とその類型」 『月刊言語』 37(7): 36-43.
- 丸尾誠 (2004) 「中国語の場所詞について—モノ・トコロという観点から」 『言語文化論集 (名古屋大学言語文化部) 』 25(2): 151-166.
- 丸尾誠 (2005) 『現代中国語の空間表現に関する研究』 東京: 白帝社.
- 三宅知宏 (1995) 「ヲとカラ—起点の格標示—」 宮島達夫・仁田義雄 (編) 『日本語類義表現の文法 (上) 』, 67-73. 東京: くろしお出版.
- 三宅知宏 (1996) 「日本語の移動動詞の対格標示について」 『言語研究』 110: 143-168.
- 村木新次郎 (1983) 「迂言的なうけみ表現」 『国立国語研究所報告 74 研究報告集 (4) 』 秀英出版.
- 村木新次郎 (2012) 『日本語の品詞体系とその周辺』 東京: ひつじ書房.
- 榎山洋介 (2014) 『日本語研究のための認知言語学』 東京: 研究社.
- 森田良行 (1988) 『日本語の類意表現』, 254-256. 東京: 創拓社.

- 森宏子 (1998) 「“从”の空間認識」『中国語学』245: 122-131.
- 森山卓郎 (1988) 「場所表現の類型—場所・方向・移動」『日本語動詞述語文の研究』東京: 明治書院.
- 山田孝雄 (1913) 『奈良朝文法史』東京: 宝文館.
- 和氣愛仁 (2000) 「二格名詞句の意味解釈を支える構造的原理」『日本語科学』7: 70-94.

[中国語]

- 储泽祥 (1997) 「现代汉语的命名性处所词」『中国语文』260: 326-335.
- 方经民 (2004a) 「现代汉语地点域和方位域在认知基础上的对立」『庆祝《中国语文》创刊五十周年学术论文集』, 196-209. 北京: 商务印书馆.
- 方经民 (2004b) 「现代汉语空间名词性成分的指称性」『语法研究和探索』12: 197-209. 北京: 语文出版社(中国语文杂志社).
- 江蓝生 (2000) 「汉语使役与被动兼用探源」『近代汉语探源』北京: 商务印书馆.
- 江蓝生 (2014) 「连一介词表处所功能的来源及其非同质性」『中国语文』363: 483-497.
- Lammare, Christine (柯里斯) (2003) 「汉语空间位移事件的语言表达—兼论述趋式的几个问题」『現代中国語研究』5: 1-18.
- 李佐丰 (2003) 「先秦汉语的自动词及其使动用法」『上古汉语语法研究』北京: 北京广播学院
- 刘丹青 (2001) 「方所题元的若干类型学参项」『中国語文研究』12: 11-22.
- 刘丹青 (2002) 「汉语中的框式介词」『当代语言学』4(4): 241-253.
- 刘丹青 (2003) 『语序类型学与介词理论』北京: 商务印书馆.
- 刘月华主编 (1998) 『趋向补语通释』北京: 北京语言文化大学出版社.
- 刘月华·潘文娣·故鞞 (2001) 『实用现代汉语语法(增订本)』北京: 商务印书馆.
- 吕叔湘主编 (1999) 『现代汉语八百词(增订本)』北京: 商务印书馆.
- 马贝加 (2002) 『近代汉语介词』北京: 中华书局.
- 王惠 (1997) 「从及物性系统看现代汉语句式」『语言学论丛』19: 193-252.
北京: 商务印书馆.
- 杨树达 (1924) 「古书疑义举例续补」『古书疑义举例五种』, 185-249. 北京: 中华书局.
- 张赫 (1999) 『汉语介词词组词序的历史演变』北京: 北京语言文化大学出版社.
- 朱德熙 (1982) 『语法讲义』北京: 商务印书馆.

[英語]

- Brugman, Claudia (1983) The use of body part terms as locatives in Chalcatongo Mixtec. *Survey of California and Other Indian Languages* 4: 235-290. University of California, Berkeley.
- Chao, Yuen Ren (1968) *A Grammar of Spoken Chinese*. Berkeley: University of California Press.
- Fillmore, Charles J. (1975) An alternative to checklist theories of meaning. *Berkeley Linguistics Society* 1: 123-131.
- Gruber, Jeffery, S. (1976) *Lexical Structures in Syntax and Semantics* (North-Holland Linguistics Series: 25).
- Hawkins, Bruce Wayne (1984) *The Semantics of English Spatial Prepositions*. Ph.D. dissertation. University of California, San Diego.
- Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson (1980) Transitivity in Grammar and Discourse. *Language* 56(2): 251-299.
- Heine, Bernd, Ulrike Claudi and Hünemeyer (1991) *Grammaticalization: A Conceptual Framework*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Iwata, Seizi (2008) *Locative Alternation: A Lexical- Constructional Approach*. Amsterdam: John Benjamins.
- Jackendoff, Ray (1983) *Semantics and Cognition*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structures*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Johnson, Mark (1987) *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Kimura, Hideki (1984) On two Functions of Directional Complements 'lai' and 'qu' in Mandarin, *Journal of Chinese Linguistics* 12(2): 262-297.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald, W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol. I. *Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.

- Langacker, Ronald, W. (1990) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald, W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol. II. *Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald, W. (2004) Possession, location, and existence. In: Augusto Soares da Silva et al. (eds.), *Linguagem, Cultura e Cognição: Estudos de Linguística Cognitiva*, Vol. I , 85-120. Coimbra: Almedina.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*. Chicago: University of Chicago Press.
- Levinson, Stephen, C. (1996) Frames of reference and Molyneux's question: crosslinguistic evidence. In: Paul, Bloom et al. (eds.), *Language and Space*, 109-169. Cambridge, MA: MIT Press.
- Levinson, Stephen, C. and Wilkins, David, P. (eds.) (2006) *Grammars of Space: Explorations in Cognitive Diversity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Li, Fengxiang (1997) Cross-linguistic lexicalization patterns: Diachronic evidence from verb-complement compounds in Chinese. *Sprachtypol. Univ. Forsch. (STUF)*, Berlin 50 (3): 229-252.
- Matsumoto, Yo (1999) On the extension of body-part nouns to object-part nouns and spatial adpositions. In: Barbara A. Fox et al. (eds.), *Cognition and Function in Language*, 15-28. Stanford: CSLI Publications.
- Matsumoto, Yo (2003) Typologies of lexicalization patterns and event integration: Clarifications and reformulations. In: Shuji Chiba et al. (eds.), *Empirical and Theoretical Investigations into Language: A Festschrift for Masaru Kajita*, 403-418. Tokyo: Kaitakusha.
- Peyraube, Alain (1994) On the history of Chinese locative prepositions. *Zhongguo jing nei yuyan ji yuyanxue* 2: 361-387.
- Pinker, Steven (1989) *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Quirk Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

- Reddy, Michael J. (1979) The conduit metaphor: A case of frame conflict in our language about language. In: A. Ortony (eds.), *Metaphor and Thought*, 284-297. Cambridge: Cambridge University Press.
- Slobin, Dan I. (1996) Two ways to travel: Verbs of motion in English and Spanish. In: Masayoshi Shibatani & Sandra A. Thompson (eds.), *Grammatical Constructions: Their Form and Meaning*, 195-219. Oxford: Oxford University Press.
- Slobin, Dan I. (2004) The many ways to search for a frog: Linguistic typology and the expression of motion events. In: S. Strömquist & L. Verhoeven (eds.), *Relating Events in Narrative: Vol. 2. Typological and Contextual Perspectives*, 219-257. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Sun, Chaofen (1996) *Word-Order Change and Grammaticalization in the History of Chinese*. Stanford: Stanford University Press.
- Svorou, Soteria (1994) *The Grammar of Space*. Amsterdam: John Benjamins.
- Talmy, Leonard (1975) Semantics and syntax of motion. John P. Kimball (eds.), *Syntax and Semantics*, Vol. 4: 181-238. San Diego: Academic Press.
- Talmy, Leonard (1985) Lexicalization patterns: semantic structure in lexical forms. In: Timothy, Shopen (eds.), *Language Typology and Syntactic Description*. Vol. III. *Grammatical Categories and the Lexicon*, 57-149. Cambridge: Cambridge University Press.
- Talmy, Leonard (1991) Path to realization: a typology of event conflation. *Berkeley Linguistics Society* 17: 480-519.
- Talmy, Leonard (2000a) *Towards a Cognitive Semantics*. Vol. I. *Concept Structuring Systems*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Talmy, Leonard (2000b) *Towards a Cognitive Semantics*. Vol. II. *Typology and Process in Concept Structuring*. Cambridge, MA: MIT Press.

論文の内容の要旨

論文題目： 空間表現に関する日中対照研究

—認知意味論の立場から—

氏 名： 鄭 若曦 (ZHENG RUOXI)

本研究では、中国語と日本語の空間表現に見られる様々な共通点と相違点を手掛かりに、両言語の話者が空間移動事象に関連する様々な概念をどのように言語化し、カテゴリー化しているのかに関して、認知意味論的立場から考察を行った。

第1章では、まず認知意味論的立場から空間表現を研究することの重要性を指摘した上で、博論全体の構成を紹介した。第2章では、先行研究に基づき、移動事象を構成する意味要素（基本的な意味要素、付随的な意味要素）を紹介した上で、日本語と中国語がこれらの意味要素を言語化する際に、それぞれどのような言語手段を持ち合わせているかをまとめ上げた。特に、両言語が移動の「経路」と「場所」を表す際、それぞれどのような基本的特徴を持つかに関して重点的に紹介した。なお、この章は本研究のオリジナルの考察（第3章から第7章）に入る前の前提知識をおさえるための章であり、筆者自身の主張は基本的に入っていない。

第3章から第7章までが本研究の主な考察と主張であり、主に二つの考察視点から分析を行った。

一つ目の考察視点は、同一の言語形式が複数の意味を持つ場合、その背後にある意味拡張の原理を明らかにすること、更に言語間で意味拡張の範囲と方向に違いが見られた場合、その違いが何によるのかを明らかにすることである。この観点からの考察は、主に第3章と第4章で行った。

まず、第3章では、両言語で起点を導く“从”と「から」が中間経路を導く場合にも使える現象に注目し、起点と中間経路が認知的にどのように繋がっているのか、また“从”の表し得る中間経路の範囲が「から」より広いのはなぜかに関して考察を行った。具体的

には、中間経路が「領域間の境界」にあたる場合は起点としての性格も併せ持つという従来の説明の問題点を検討し、「領域間の境界説」は現代語の「から」の起点用法と中間経路用法の繋がりを説明できても、“从”の一部の中間経路用法と起点用法の繋がりに関しては説明力が足りない指摘し、“从”の全ての中間経路用法を説明するためには語源である「随行義」に遡る必要があると主張した。また、日本語の「から」も、通時的に遡れば、現代語の“从”が持つ全ての中間経路用法を持っていた時期があったが、一時期「より」に淘汰されたことに加え、競合する「を」格の影響により、現代語の「から」は大部分の中間経路用法を失ってしまったのだという歴史の変遷も指摘した。

次に、第4章では、両言語の使役移動構文（「太郎は学校から本を持ってきた」「太郎从学校拿回了一本书」）が取得事象を表す場合にも使える（「太郎は花子から本を借りた」「太郎从花子那儿借了一本书」）という現象に注目し、使役移動構文から取得構文への拡張原理は何か、また「から」取得構文は“从”取得構文より拡張範囲が広い（＝“从”取得構文は他動性の高い取得動詞しか許容できず、取得対象が抽象物の場合は具体性・個性性の高いものしか許容できない）のはなぜかに関して考察を行った。具体的には、まず日本語が「太郎は花子から本を受け取った」のように他動性の低い取得動詞をも述語動詞として許容できたのは、取得事象は使役移動事象と違って、与え手（＝花子）も取得対象の移動を引き起こせる行為者としての側面を持っており、よって受け手（＝太郎）は必ずしも取得対象の移動の直接的な引き起こし手でなくてもよく、単に移動を許容する立場にあるだけでもよいと述べた。このような拡張を「強制使役から許容使役への拡張」と特徴づけた。また、日本語が「太郎は花子から名義を借りた」「太郎は花子から批判を受けた」のように取得対象が具体性・個性性の低い抽象物の場合も許容できたのは、「物理的移動」から「所有権の変化」「知識情報・思考感情・態度評価の伝達」「行為エネルギーの伝達」へのメタファー的拡張が徹底しているためだと述べた。一方、中国語の“从”取得構文の意味拡張が抑制されているのは、敢えて取得対象の移動の引き起こし手でない受け手に視点を置く取得動詞が極めて少ないという事情に加え、与え手の場所化が常に必要であることから、“从+与え手”は依然として空間性が強いと説明を試みた。

二つ目の考察視点は、同一の意味要素を言語化する際、両言語はそれぞれの言語成分（中核部と非中核部のどちら）で表現することを好むかである。Talmyの一連の研究では、正にこのような観点から、移動を構成する最も重要な意味要素である「経路」が諸言語で

どのように言語化されているかを考察している。本研究では、同様の観点から、第5章と第6章でそれぞれ「探索領域」（＝基準物を参照点とした移動物の可能な存在位置）と「場所の状態変化」（＝移動物によって全面覆われる、または内部を満たされること）が日本語と中国語でどのように言語化されているかを考察した。

まず、第5章では、「探索領域」が動詞述語によって言語化される場合に焦点を当て、中国語は“装+进（来/去）”“貼+上（来/去）”のように、「探索領域」に関する情報を非中核部にあたる方向補語の“进（来/去）”“上（来/去）”で表現するタイプの言語であるのに対して、日本語は「詰める」「貼る」といった中核部に立つ動詞自身で表現するタイプの言語だとわかった。上記のことから、両言語で中核部に立つ“装”“貼”や「詰める」「貼る」のような「設置動詞」は、実は「探索領域」を指定しているか否かという点で対照的であることがわかった。更に、上記の両言語の「設置動詞」の意味の違いを考慮することで、“貼在本子上”“ノートに貼る”“装在行李箱里”“スーツケースに詰める」に見られた両言語の相対名詞“里”“上”と「(の)中」「(の)上」の有無の違いも自然に説明ができると主張した。

次に、第6章では、「場所格交替」を手掛かりに、日本語は「塗る」のように、移動物の位置変化も場所の状態変化も中核部に立つ動詞で表現する傾向が強いのに対して、中国語は“涂+上”“涂+満”のように、移動物の位置変化も場所の状態変化も非中核部にあたる結果補語の“上”“満”で表現するタイプの言語であることがわかった。また、日本語が「被せる」「覆う」のように、移動物の位置変化と場所の状態変化のどちらか一方しか表せない動詞が多いのに対して、中国語の「他動詞+結果補語」からなる組み合わせ（“蒙+上”）は、より柔軟に場所格交替に参加できることも観察できた。そのような認識の柔軟性は、動詞述語（主に結果補語）の図地未指定性や、「行為+結果」で事態を分析的に語る中国語の「意合性」の強さと関係が深いということも指摘した。

最後に第7章では、全体のまとめと今後の課題について論じた。